

(議事録)

都市想像会議

第三回「才能×都市」

2016年1月27日(水) 18時30分～20時30分

ヒカリエ 8F COURT

登壇者:



黒崎輝男
流石創造集団株式会社
CEO



林 厚見
SPEAC 共同代表
東京 R 不動産ディレク
ター



澤田 伸
渋谷区副区長



中谷日出
NHK 解説委員
(芸術文化、デジタル
担当)

ファシリテーター



左:左京泰明 シブヤ大学学長



右:紫牟田伸子 編集家/プロジェクトエディター/デザ
インプロデューサー



紫牟田:「都市想像会議」第三回は「才能×都市」、「クリエイティビティを育む都市をデザインできるか」というテーマで議論を行いたいと思います。渋谷区は、IT ベンチャーやファッション、音楽、デザインなどが生まれるまちというイメージがありました。いまはどうか。そしてこれからどうなるか。本日は渋谷を中心にしながら、クリエイティビティについて考えていきたいと思います。まずは、ご登壇いただく方々に自己紹介をお願いしたいと思います。

黒崎:僕はすべてのことに部外者というような感じで、デザインやデザインの再生をしてきました。別にデザインのことを勉強していたわけではありませんが、学生の頃、ヒッピーみたいに世界中を回り、帰ってきて就職もせず、骨董品が好きで (IDEE という) 家具屋をつくったり、TOKYO DESIGNERS BLOOM (東京デザイナーズブロック) というデザインイベントなどをやってきました。いまは「コミュニケーション 246」や「ファーマーズマーケット」などいろいろなことをハイブリッドにあわせちゃうというやり方でいろいろやっています。最近公園のあり方をちょっと考えているんです。ローリングストーンズやアズティアーズゴーバイなどの歌に「公園で遊んでいる子どもたちを涙を流しながら眺めている」という内容の歌があるんですが、最近の僕は、涙を流しながらいろいろなことを眺めています。

林:僕の本業は不動産屋です。12年ほど前から「東京R不動産」というサイトをやっていて、もともと建築好きの仲間が集まって、まちなかのちょっと隙間のある物件を探してマッチングすることから徐々にいろいろ広がっていき、これは僕らなりの小さな都市計画のひとつの活動であると思っています。僕は生粋の渋谷育ちで、中学・高校・大学と遊び場は渋谷でした。そのせいかどうかはわかりませんが、ゆるいまちが好きだし、そのほうがいと信じています。

中谷:私は渋谷区在住で、実は外苑前のシブヤ大学の事務局があるビルから一軒隔てて僕の家です。普段は NHK の解説委員という仕事をしています。解説委員というのはものごとをわかりやすくみなさん

に説明するのが仕事なんですけど、もう 17 年もやってまして、いまでは日本一わかりやすい解説委員と、誰も言ってくれないんで自分で言っています。番組の企画制作も傍らでやっていますが、私はもともと記号学というのをやっていまして、ものごとをなんでも記号化してしまおうということで、NHK のさまざまなアクションを記号化してきました。もともとクリエイティブ出身なので、今日はその視点から話ができるかと思っています。

澤田: 私は 30 年間、民間企業に勤めていましたが、2015 年 10 月 1 日に渋谷区副区長に就任しまして、まだ 4ヶ月目です。56 歳にしてピカピカの一年生。これもまたクリエイティブな人生のあり方だと納得して日々努力をしています。広告会社には 16~7 年いました。クリエイティブな仕事以外にも苦渋をなめる仕事もありましたけれど、自分の大きな成長の源泉になったと思います。その後、外資系の投資ファンドに転じました。当時、NHK で「ハゲタカ」というドラマがありましたが、倒れそうな会社を買って再生し収益をあげるという仕事でした。私の好きな言葉は「成長」です。30 年間民間企業で常に右肩上がりだけを考えてきました。いま行政マンのこの立場になって、「成長とはいったい何なのか」を自問自答しています。今日はそんな話もできたらいいなと思っています。

左京: 僕の自己紹介は割愛させていただき「都市想像会議」について少し話します。普段、シブヤ大学を通じておもしろい仕事、大事な仕事をしているいろいろなまちの方々にお会いします。でもなかなか交わることがなかったりします。また、打ち合わせの内容や風景がすごくおもしろく豊かなので、この企画では、思いもかけない出会いから新しいものごとが生まれたりすることを期待しています。今日も本当に個人的にすごく嬉しい企画で、お仕事をよく拝見している素晴らしい重要な役割を担っているみなさんが、こういうふうに座を囲むということができて、やっていてよかったなあと思います。今日はどんな話になるか楽しみでもあります。

今回のテーマ、「才能×都市」ですが、これもいろいろなお話していますが、10 年くらいシブヤ大学の活動をしていて、いまくらいこれから渋谷のまちをどうしていこうかと議論されていることはないんじゃないかと思います。ひとつには 2020 年の東京オリンピックなどもきっかけにして、ハードとソフトの両面での渋谷のまちがどんどん変化している。ハード面ではもちろん渋谷駅周辺の再開発もそうですし、ソフト面では、昨年春に制定された「男女平等及び多様性を尊重する社会を推進する条例」(通称同性パートナーシップ条例:https://www.city.shibuya.tokyo.jp/kusei/jorei/jorei/pdf/danjo_tayosei.pdf)などもそうですね。渋谷のまちの変化に直面しているいま、目先の利益だけでなく持続的・中長期的に渋谷のまちの魅力を高めていくには、どういうところを大事にしながら渋谷のまちをつくっていけばいいのかを考えると、今日のテーマは渋谷のまちの根っこに近いテーマではないかと思っています。

■クリエイティブであるとはどういうことか

紫牟田: それではディスカッションを始めたいと思います。ここには、「才能」と「クリエイティビティ」という異なる意味の言葉が二つ並んでいます。才能を活かすということをクリエイティビティととらえて設定してはいるのですが、まず、クリエイティブであるということはどういうことかをそれぞれのみなさんがどうお考えなのかをうかがいたいと思います。

黒崎: 「そうぞうりよく」は、クリエイティブとったりイマジネーションとったりしますよね。イマジネーションが湧くような場面、空気、行為ができる場所があることが、クリエイティブと言えるのかなと思います。リチャード・フロリダが『The Rise of the Creative Class』(邦訳『クリエイティブ資本論』)で、資産がどうだと

かいうよりも、とにかくクリエイティブなことがわかる人——アートだとかデザインだとか音楽だとか、味のことが詳しくたり——そういうデリケートなことをちゃんと美意識を持ってわかる人たちがクリエイティブなんだ、というんですね。それがわかっている人たちが、金融だとかでも能力を発揮する時代になってきたというバックグラウンドがあると思います。逆にそういう人たちはどういうところに集まるのか。僕が「IDEE」という家具屋をやりはじめて、最初にAXISというデザインギャラリーで展示したときに、「あの人が来るといつもここに座る」というコピーを仲畑貴志というコピーライターに書いてもらった。自分の飼っている犬でも自分の居場所がある。ネコもそう。クリエイティブな人がいつもいる場所、はまる場所というか逃げ場所というか、そういう場所があるかどうか。そういう場所があるところが居心地のいい都市なんじゃないかと思うんですね。それが僕にとっては最近ない。好きな喫茶店がつぶれたりなんかして。百軒店とかジャズ喫茶やロック喫茶、小さなギャラリーや雑貨屋さん、そういうところがあるとほっとすると思うんですね。最近ではヒカリエみたいなのがどんどんできちゃって逃げ場所がないわけです。大地震が起きた場合、水道が止まっちゃうとする。そうすると渋谷区には井戸がどこにもないんじゃないかと思う。神戸の大震災でも井戸がなくて、山口組かなんかのところの井戸にみんな水をもらいに並んだらしいんですが、水道がなくなって電気が切れたら自家発電がどこかにあったりとか逃げ場所があったりとか、最低限ないとおかしいんじゃないかと思うんです。そこでいま、いい公園とはクリエイティブな場所だと思って、一生懸命公園を考えているところなんです。ブラーというバンドの「Parklife」という有名な曲があるんですが、それは要するに、逃げ場所がなくて仕事もなくて、公園にいるという内容なんですね。僕は公園的な要素が鎮守の森なんじゃないかと思っているんです。鎮守の森にはだいたいタブノキがあり、タブノキのおかげで延焼しない。そういう場所が日本にはいっぱいあったと思う。そういう場所が渋谷の界隈にあんまりないんじゃないかなと。そういうことをつくることにいま情熱を燃やしていますね。

紫牟田: 逃げ場所、居場所というキーワードをいただきました。たしかにそういう場所が少なくなっているという印象はありますね。林さんは、クリエイティブであるとはどういうことだと思いますか。

林: いまの場所の話から言うと、いま個人店が減っていく社会システムですよね。僕も行きつけの店が閉まってへこんでいます。僕はやっぱりダメ人間の居場所が減ってはいけないという強い思いがあります。ポジティブな知恵やおもしろさは人間のダメ側のサイドのほうにかなりあるはずなので、そこを掘り出す環境がないといけないし、そのための制度もなければいけない。日本人は真面目だし、政治家も真面目にやらなければいけないみたいな空気でこれまで来ている感じがするので、ダメな部分というところから引き出すクリエイティビティは居場所論では大事だなと思って聞いていました。「クリエイティブ」という言葉はけっこう微妙だと思っているところがあります。創造都市(クリエイティブシティ)もいろいろな使われ方をしていますし、日本ではクリエイターをデザイナーやアーティスト、カメラマンみたいなイメージですよ。それはそれでかっこいいクリエイティブはあるんだけど、きわめて地道な、別におしゃれじゃないクリエイティブもすごく好きなんです。今日もクねずみ退治の職人が超クリエイティブな案を出しまくっていたんです。おしゃれなカフェでアイデアを練っているわけじゃなくても、クリエイティブなんです。そういうことも含めて、多様なシーンが出るというパースペクティブはもっておきたいというところはあります。

中谷: クリエイティブなねずみとりってどんなものなんですか。すごい興味ある。

林: アイデアがどんどん出てくるし、家のことがすごくわかっているし、経験があつて、たぶん彼の中です

ごく考えている。考えて知恵を蓄積して工夫アイデアがたくさんある。すばらしかったです。

中谷:蓄積といえば、僕はクリエイティブの源泉はアーカイブだと思っていて、いま世界中のアーカイブを取材しているんです。貯めた情報の中にいろいろなものが出てくる源泉があると思っている。いろいろな情報を整理してつむいで編集していくのがクリエイティブなのではないかと思うんですね。情報化社会の中では、数値化も含めて、情報をいかに貯めていけるかということが、これからのクリエイティブの源泉なのではないかと思ってならない。NHKのアーカイブは川口市にあるんですけど……すみません。

澤田:私自身はクリエイティブにはあまり自信がありませんが、博報堂時代にはクリエイティブ人材にたくさん関わってきました。だいたいみんな共通しているのは、人間として社会的には若干欠落しているところがある。ルールを守らないとか、平気で待ち合わせに6時間遅れてくるとか、打ち合わせの時間が夜の2時からとか。そういう人たちとずっとつきあってきたものですから、当時はクリエイティブ部門の人はあまり好きじゃなかったですね。少し真面目な話をすると、渋谷というマチで考えると、異質のものや個性を確実に受け入れている寛容さをいかに持ちうるのか、というのがクリエイティブシティの方向性と思っています。これは決して答えではなく、方向感ですね。また、ビジネスの世界でも生活の場でも、地方自治体の話でもなかなか言語化しにくいものがありますよね。言語化しにくいものを言語化する能力というのが、これからクリエイティブなのではないかと思うんです。昔でいうとコピーライティングですよ。言語化しにくいものを言語化していく。心の奥底にあるようなインサイトを描写する、あるいは透視する能力というか、それはひとつの才能、クリエイティブなあり方だと思う。誰にもできるわけではない。できそうでできない。これがクリエイティブの難しいところで掴みにくいところかなと思っています。例えば、営業でいえば売り込んでいないのに売れる人がいますよね。これも実は非常にクリエイティブだと思います。そういうものが化学反応を起こしていく。渋谷の過去もそうだったし、これからもそこは普遍的なところかなと感じますね。

黒崎:言葉で言い表せないというか、言葉で言い表せないことがある、ということをお認めしておくということもひとつだと思います。ウイトゲンシュタインという哲学者は、言葉で言えないことがあるんだと最初から認めている。そのためにいろいろな言葉を使ってさんざん説明することに一生を捧げたんですよ。それを音楽で表現したり、アートで表現したりする。アートでしか表現できないものがある。僕の祖母は変な人で僕が子どもだった頃になんでもオペラみたいに歌を歌うんですよ。「テルちゃん、それはいけないですよ〜」ってオペラみたいになんでも歌っていた。それにオルガンで曲をつけて、賛美歌のように歌ったりしていた。「なんだこのばあさん」と思っていたけども、自分もそれに近いクレイジーなところがあってね。そういうこととか……。

紫牟田:職能としてのクリエイターの話もありますが、本来そもそも人に備わっている所与のものとしてのクリエイティビティをどう考えていくのかということが大きなテーマではないかと思います。おばあさまの話のように、生活を楽しくしていくということかもしれません。

林:人には誰もおもしろい部分とちゃんとした部分があって、おもしろい部分を引き出す教育も大事です。全然喋らない地味な人が実はめちゃくちゃおもしろいみたいな話がたくさんあるじゃないですか。物件も実はそうなんです。そういう意味で、僕が先ほど“ゆるい”と言ったたのにはいろいろな意味があって、寛容性とか多様性とかにも通じる側の話もありますが、一方で寛容な社会にしにくい理由

のひとつにモンスターの存在があったりすると思うんですね。モンスターがいなければルールももっとゆるやかで、川にも手すりがなくていいのに、モンスターがいるから、というのが日本ではどうしてもひっかかる場所なんです。モンスター論で言えば、僕もモンスターになる時があると思った例があります。友人の新築マンションの完成確認会に立ち会ったときのことで。マンションがあまりにもすごく“ちゃんとしています”というふうにつくられているので、細かいことを言わなきゃ、という雰囲気になってしまうんですね。締めりが悪いとか傷がついているとか、クロスが破れてませんかとか……。僕は質感のある空間では全然気にならないし、むしろこれは味ですよ、なんて言っているくせに、ついクレームを言っている。つまり、もともと寛容であるようにものやルールがつくられるというコモンセンスが成り立っていれば、ゼロとは言わないまでも、モンスターは出にくいと思う。それを真面目に精度を高めていながら「ゆるさもいいよね」なんていってもうまくいかなくて、コンフリクトが起こり、結果的にキツキツした世界になってしまうような気がしています。

中谷: 優秀な人がクリエイティブであるというのは当たり前ですけど、優秀じゃない人も誰しもがクリエイティブの資質はもっていて、そのきっかけをいかに後押しするかということだと思うんですね。僕自身も、小学校・中学校時代は非常に凡才で、成績も中の下くらいでずっときたわけ。でもあるとき化けたんですよ。いま美術大学の先生をしていますけれど、化ける瞬間は誰にもあって、全然ダメなやつが何年かたつとピカピカなクリエイターに、それもものすごい立派な仕事をするようになるんです。辿ってみると、そいつも化ける瞬間がある。それは人だったり場との出会いだったとの出会いなんですよ。その出会いが渋谷にあるかどうかかなのかな、という感じがしています。僕も人との出会いで化けさせてもらった。ある意味勘違いかもしれない。でも自分のつくったものに酔えた瞬間に、「僕はできるかも」という気持ちになれた。それがクリエイティブのきっかけ、というか本物になる(本物かどうかわからないですが、僕は本物だと思っている)瞬間があった。それぞれの人の中にそういう瞬間があると思う。そういうきっかけをどうやって与えられるかなんかと思っているんです。凡人の中にポテンシャルがあって、どこをどう押していけばこうなっていくのかというポイントがある。そこにクリエイティブの発端があるのかなという気がするんですね。

紫牟田: 具体的にはどういう出会いだったんですか。

中谷: 僕は文章を書くこととか、ものを計算することができなくて、本当にアホだったんですよ。アホなんですけど、こういうふうに生かしていただいてなんとなく仕事ができているというのは、お前でもできる、みたいなのがあったわけ。僕の学生さんたちを見ていると、本当に自信のない子はいっぱいいるんですけど、そのまま社会に出ていってフェードアウトするかというところじゃない。きっかけによってボンとステップアップしていくんですよ。それがすごくおもしろい。優秀な子ほどたいしたことないとか。なんとなくそれが当たり前になってしまっていて、なにを言っても「ふうん」ってすーっといく。美大にはなんにも考えていない子がいるんですけど、ポテンシャルを押したときの響き具合がおもしろいなと思っています。

黒崎: “おもしろい”は「面白い」と書くじゃないですか。表にあるものがしらぶということだから、目の前のことを理解して、「あ、そうか」と腑に落ちるといふか、目からウロコの瞬間みたいなのを本来「面白い」といっているんですね。「interesting」とか「funny」とかということじゃなくて、なんか「enchant」といふか、魅力的だというようなことがおもしろい。おもしろさの追求が、いまの学校教育ではあまりなくて、笑っていると「真面目に勉強しなさい」といわれるわけ。でも、おもしろいことって顔がほころぶ。さっきか

ら言っているように「ゆるい」シーンや場面が渋谷にあればいい。植物があったり花があったり、おもしろい人がいたり、おいしい食べ物があったり、「おもしろい」という概念がいっぱいあるようなまちが必要だと思う。

実は「クリエイティブシティ・ラボ」というのをつくって、ポートランドから人を呼んで都市をどうしたらいいかとかを話す場をつくっているんですが、アメリカだとポートランド、ニュートランド、ブルックリンとか(最近、ブッシュウィックが最近おもしろいんだけど)、クリエイティブシティといわれている都市に行ってみると、おもしろいことはいっぱいあるわけです。共通しているのは、貧乏な人がいたり、工場があったり工房があったりホームレスがいたりするとところをどんどん廃してきれいに安全に暮らしていると、あまりおもしろくない。ヘンなほうがおもしろいと僕は思う。そういうヘンなところがいまだどんどんおもしろくなってきている。だからヘンなおもしろい人が伸びるということで、真面目で優等生できちっとしている人はクソくらえだったことでしょ、基本的に(笑)。

中谷:そうはいつてませんが、まあ、近いものはあります(笑)。

黒崎:僕はそういっちゃうわけです。

中谷:NHK なんですいません。

林:真面目な人がヘンな人になるのが僕は大好きです。すきまな空間、例えばなくなってしまう武蔵小山でものんべえ横丁でもいいんですけど、そういうところで出会うサラリーマンのおじさんとはおもしろい会話ができるのに応接室だとできない、みたいなどころがあるんですよね。大人のコーポレイトの顔とパーソナルな顔、ちゃんとした顔とダメ人間編とすれば、コーポレイト側じゃないほうを膨らませるべきなんだと思うんですね。でも制度をつくるとか開発するとかいうときは、コーポレイト的なお話でなければいけないというような前提がある気がするんですよ。そこをやっぱり渋谷に崩していただきたい。例えば東急さんが渋谷の開発をするときに、優等生的なコンセプトで語る。それは必要な一面ですが、堂々と裏面みたいなところを、むしろそっちがテーマだ、くらい言い切ってしまったほうがかっこいいはずなんです。勇気がいるように見えるんですけど、やっちゃったもん勝ちみたいなことになるような気がしますね。偉い人がパーソナルというか、ダメサイドを見せると勝ちだと思います。不動産の話でいうと、横丁を再開発して大きいものを建てて、下を商業で貸して、チェーン店に貸す。家賃が高いから当然そうなるロジックがあるんですけど、例えば恵比寿横丁などでは、チェーン店に貸すよりも占有面積の坪単価、つまり家賃の効率を高くしてうまくいってます。ロケーションによっては当たり前だと思われている空間の作り方はうまくいかないという状況になってきていますよね。

紫牟田:黒崎さんは、ファーマーズマーケット(<http://farmersmarkets.jp>)などの場所づくりにいま力を入れてますね。

黒崎:ファーマーズマーケット(写真上2点)には、年間 150 万人くらい来るんですよね。国連大学と組んでやっているんですが、国連大学の事務局長をのんべえ横丁に連れていくとえらく喜ぶんですよ。いまつぶそうとしているじゃないですか。隣で公園をつくるのにも横丁の入り口を塞いでしまおうとか……。あそこがおもしろいから、といま働きかけているんです。



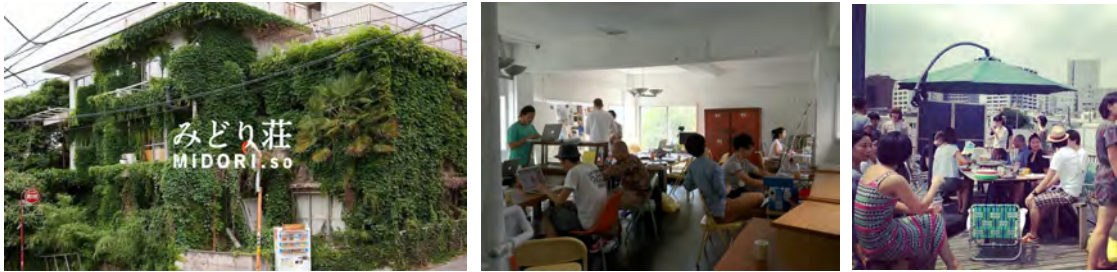
ファーマーズマーケットはコンテンツのプランニングをやっているからおもしろいんですね。パン祭りには2万人くらい来て、1日1千万円くらいパンが売れたりする異常な状態が起こるんです。なぜかという、ただパンを売るならデパートでもやりますが、イースト菌を集めている人とか個人で小さくやっている人を集めて、そこでしか食べられないものがこの日に全部集まるよということをしたので、ものすごくいっぱい人がきた。自分たちが興味があっておもしろいと思うこと、普通ではやらないことをやっちゃうと。自由大学でも普通では学ばないと言われるようなこと、たとえば「靴磨き学」とか「朝ごはん学」とかをキュレーションしていこうと、「学びのキュレーション」ということでやっています。アメリカのグーグルにしろ、ナイキにしろ、アップルにしろ、本社のことをキャンパスと呼びます。全体が学びを求めている。例えばスポーツのことを探求しているのがナイキキャンパス。すべてがスポーツ施設で学校みたいで、それ自体が会社です。その地域全体が学びで、何かを求めてみんな追求しているところが一番伸びているところなんですよ、将来的にも。



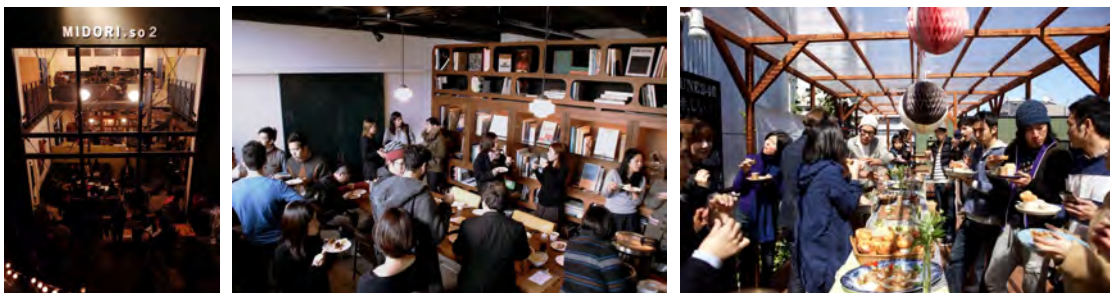
都市がキャンパスであるというのが僕たちのテーマです。本屋も古本屋もあるし、コーヒー屋もあるし、あらゆるおもしろい要素がある。ヒカリエもそういう要素を人工的につくっている。僕は「コミュニン 246」(写真上)という場所もつくっています。「キュレーターシティ」ということで。表参道の狭いヘンな不定形の400坪URの所有地でなにかつくろうと。すごく安いお金でつくりました。林さんが言っていたように、坪効率はめちゃくちゃいいんです。でも全然お金の匂いがしない。これ(写真下左)はレインボーコミュニンといって、LGBTの人たちが集まっているいろんなイベントをやっています。シェアオフィスもあります。やっぱり施設ではなく、状況だと思うんですね。状況をつくるというのはやっぱり情報が入っていないといけない。だから、施設産業としての開発はもう終わっていると思う。イベントやコンテンツやアートがあって、情報が流れていて、常にそこに人がいて状況ができるというのが都市の状況ですよ。僕はクリエイティブな状況にちょっと興味があって、いま熱中しているいろいろなことをやっているんです。これ(写真下中・右)は泊まれるように改造した小さな車です。中にシャワーもあって、Airbnbで泊まれる。



廃墟になったみどり荘という代官山にある建物を全部借りてそこをシェアオフィスにしたりもしています(写真下3点)。フリーランスの人とか、小さい企業をしていたりとか、屋上で食事会をしていたりとかでいろいろなことが起こる。誰が運営しているのか、誰が経営しているのか、誰もよくわからない。そういう状況を見て僕は後ろですごく喜んでいるわけです。スウェーデンのデザイナーの展示会をしたり、普通とちょっと違うことをできる場所です。ロケーションとしては悪いけれど、すごくいろいろな人が来るんです。



この次に、コミュニティの中にみどり荘2をつくりました(写真下3点)。不動産産業がやっているシェアオフィスとは大違いで、誰でも働いて、誰でもそこで仕事ができ、ちょっと食べられて、本があってライブラリーがあって、犬もいる、という和気藹々とした場所です。ライブラリーは僕の個人的なコレクションです。みんな和気藹々という感じですね。「コミュニティ」とは「パリ・コミュニティ」を元にしていて、パリ・コミュニティは1971年から72日間だけしかなかったコミュニティですが、そこに僕はすごく惹かれるものがある。周囲を軍隊に囲まれているんだけど、中で和気藹々と革命的状況みたいなのが生まれた。コミュニティはコミュニズムのもとになっていて、コミュニティのもとになって、コミュニケーションのものと概念。「コミュニティ 246」は、コミュニティをつかってやろうという意気込みで始めたんですが、まあ、そもそも2年間しかURが貸してくれないということで、うまくいって人が来れば延長してくれるみたいな言われているんです。すごく安いお金で、ちょっとしたまちをつくったというのが、僕としてはおもしろかった。



林: こういうことをやろうとすると規制の問題がいろいろとありまして。僕はいろいろなことができる場所をいまつくっているんですけど、イメージしていたのは、外で食べられるお店。客席は中にいららないな、と考えていたのですが、保健所に行ったら、屋外の客席というのは屋内の客席と同じ面積またはそれ以下でなければならないという。つまり、外に50席つくろうと思ったら、中に50席なければならないというルールなんですね。それで、壁にぶちあたっているんです。衛生・安全系からの話としてそういうルールがあるのはわかるし、それをしょうがないといってしまうと負けだと思うので、その価値観をベースから変えると

いうことを先にやったもん勝ちだと、これについても思っているんですよ。

澤田: 林さんがおっしゃることもまさにそのとおりだと思うし、規制というのは悪い部分と良い部分がたくさんありまして、地方自治体でできることと国政レベルでなければならないことなど、さまざまなレベルがある。特に日本は、おそらく規制が多い国のひとつだと思います。また、法律ができたのも何十年前だったりしている。我々も法に苦しんでいるところもあるんですよ。でもなにもできないかというところでもなくて、まさに大型の都市開発の場合は、いろいろな規制を緩和しながら法律を少し変えて大規模開発をしたりすることは日常茶飯事です。規制とクリエイティブは常に相反しながら、戦いながら、その中でクリエイティブ性は上がってくるところもあるじゃないですか。なにやってもいいというときに出てくるアイデアと、規制があるからでてくるアイデアだと、僕は後者のほうが多い。なにをやってもいいという、規制のない社会なんてないと思う。我々自身も規制を緩和しなければならないと思っています。それから、渋谷の駅の開発にもいろいろな意見があると思いますが、渋谷区は当然のことながら渋谷の駅周辺だけではない。渋谷区全体を見ていくと、のんびり横丁もあれば、90歳のおかあさんが70年間やっている居酒屋さんもある。そうしたことをいかにコンテンツとして生かしながらまちの魅力づくりをしていくか考えなければならないのです。どうしても「渋谷駅周辺＝渋谷」というイメージが強いけれども、渋谷区全体をみるといろいろな個性があります。それらとうまく連携しながらいいまちづくりをしていくというのが、いま渋谷区の方針ですね。

林: 僕はルールをデザインすることの中に本来すごくクリエイティブなものがあると思っています、そこに最近興味があるんです。建築や都市計画の世界では、いわゆるクリエイター気質の人に対して、ルールをつくるのは逆の毛色の人だという雰囲気があるんだけど、そこが変わらないと状況が変わらない、まちとしていいかたちにならないんじゃないかと思っています。思うに、ある意味、モンスターがでそうなルールだったり、多様だったりゆるかったり、緩和するとかデザインしようとするときには、社会的なコンフリクトが起こると思いますが、それはコンセプトがないからじゃないかという気がしています。コンセプトが明快でなければ、減点方式とかダメ出しがしやすい構造で議論が進んでしまう。まちならまち、区なら区でコンセプトを決めていけばいい。渋谷区だったらかなりの主観的な戦略コンセプトを決めて、そこからルールづくりをしていくということであれば、もうちょっとうまくいくんじゃないかと思うんですけど、自治体はあまり偏りのあるコンセプトを出してはいけないものなんじゃないでしょうか。

澤田: なにが偏るか偏らないかはちょっと置いておいて、渋谷区では2035年、20年先の行政ビジョンを出そうと準備しています。従来の行政ビジョンってけっこうお決まりで、「渋谷」を世田谷に変えようが横浜に変えようがどこでも使えるようなものばかりでしたし、それにだいたいビジョンというのは出しっぱなしになることが多いですよ。そういうものではないものにしようとしています。要するに行政というのは経営そのものなのです。経営に基づくビジョンというのは実現される方向を約束することになりますから、そこに向かって当然ルール緩和の話もしなければならない。特に最近は戦略特区制度等もあり、エリア特区のようなことも可能性もある。私自身は民間的な発想でチャレンジしようとしているわけです。例えば、いま渋谷区は全国の都市の中でも民泊が最も多いといわれています。渋谷区が民泊をどうするかをみんな注目している。大田区は特区申請をしています。でも、国は7日以上泊まらないといけなとか言い始めています。こんな非現実的なことってありえないでしょう。いまあえて様子を見ています。ここで走ってしまうと、税を無駄遣いすることになるから。我々は使う費用がほとんど税なので、納税者の満足度を当然担保しておかなければいけない。ちょっと新しい仕組みを考えてはいるのですが……。これは旅館業の話ではなく、シェアリングエコノミーの話ですよ。テクノロジーを使った新しい体験の話

なのです。そういうコンテキストの中で、区長も有識者も含めて議論をしているところです。そういうことにチャレンジするのが渋谷区だと思っています。渋谷区はそういう責任を負っていると思っています。

黒崎: 僕は思うんですけど、アメリカの、例えば Airbnb や Uber をスタートした人とか、twitter を始めたマーク・ドローシーとかかけっこう知り合いなんですけど、そういう人たちはヒッピードリームみたいなのが結構あった。規則がどうだとか社会がどうだとか事業計画とかなしで、フェイスブックだとかで情報を広げて仲間を増やして、コンピュータができたから遊ぼうよ、みたいな感じでスタートしている。友達を自分の家に泊めても別に悪くないじゃん、コンピュータ使って予約できたらいいじゃん、みたいな感じですよ。Uber でも、いままでタクシードライバーはお客は選べなかったけど、お客も判断できるようになる。そうすると平等になる。50/50 でイコールな感じでよくしてあげたいというのがベースにきちっとあるべきだと思うんですよ。それがあって、実現性のためにいろいろな規則を乗り越えていくというイメージなんですよ。

国連大学で餅つきをやりようとしたらダメなんですよ、渋谷区。

澤田: そうなんですか？ 食品衛生の関係ですか？

黒崎: そう。食品衛生。渋谷区だけじゃないんですけどね。昔はそれで病気になったりした人がいたから厳しくということがあったと思うんですけど、いまどきそんな？と思うんですよ。で、個人の庭だったらいいらしい。あと屋内だったらいいとか。ルールがそんなふうになってきて、ものすごく面倒臭いことになっている。自由というのは、規則に反するものなんですね。

澤田: Uber も Airbnb も、まさに「for the customer」。どうすればみんながもっと便利になるかという意思の強さだけで立ち上がってきている。なにも規制をしないというところがいいんです、あのエリアは。

黒崎: なにも規制がないですからね

澤田: あそこの行政は動かないのです。なにもしないんですよ。なにもしないから、いろいろなベンチャー企業主導の革新的サービスがどんどん生まれてきている。日本は国が主導してなにかやろうとするでしょ。次のイノベーションを起こすとか。でもなかなかうまく行きませんよね、戦略特区だとか言っても。本当は、民主導。NPO とかも含めて、そういうところが立ち上げないと。

黒崎: いいことやろうっていう奴はいっぱいいるわけ。センスがいい奴もいっぱいいる。デザイナーとかクリエイターとか。ファーマーズマーケットなんか、そういうやつを集めてそういう人が運営しているから、なんのお金の匂いもしないわけです。でもものすごく売れたりする。結果としてはそれでなにも不都合がないじゃないかと思うんです。でそこで餅つきをやりようすると、それを乗り越えてやっているわけですけど。フードカートをつくったりとか、いろいろなことをやっている。すべて基本的に“いいことをやるんだったら、行政もそれに反対しないだろう”と思ってやっている。でもやっぱりお店をつくるとなると、飲食業はいろいろな規則がありますよね。

林: だいたい前の話なのでいまは変わっているかもしれませんが、都庁前の広場。あそこはたぶんイタリアのシエナのカンポ広場を模しているのじゃないかと思うんですが、イタリアの広場は、当然そこで飲んで食べてチューして、みたいな世界じゃないですか。夜にみんなで座って食べ始めたら怒られたんですよ。

飲食だめだって。カンポ広場みたいなことをして飲食がだめだって、ないじゃん。他になにがだめかと聞いたら、飲食がだめ、というんで、じゃあ、チューはいいんだな、といったらしいらしいですよ(笑)、みたいな。ナンセンスだって言いたかっただけなんですけどね(笑)。

紫牟田:昔、ピクニッククラブがいろいろなところでピクニックする実験をしていて、いろいろなところでダメと言われていましたね。中谷さんにはシェアリングエコノミーについてどう思うかをうかがいたいのですが。

中谷:やることは当然時代の趨勢だから、どうやるかという問題なんですよ。黒崎さんがやっているような Airbnb の展開は非常にクリエイティブな雰囲気がありますよ。そういう人をどうつくるかという話だと思うんですよ。でも一方、クリエイティブの領域で、国主導でやらなければいけないことがいっぱいある。どうしても個人ではできない領域があるんです。それを国主導でやってほしいんですけど、ヘンな役人が口を出さないというのがまず基本かなと思いますね。

澤田:出すんですね……。

中谷:そう。それがものの歪む原因なわけで。澤田さんをお願いしたいのは、システムをつくるのもいいけれど、やっぱり人づくりなんです。議会も大事なんですけど、やっぱり渋谷区の職員をいかにモチベーションアップしていくか。いまデザイン思考という言葉が流行っているけれど、やっぱりものごとが規制で始まるのではなく、ものづくりから始まっていくようなやり方をシブヤ大学で職員に植え付けていくようなムーブメントが必要なんじゃないかとも思いますね。渋谷区は他の区に比べて規制が厳しいんですよ。とくに建築系の規制がものすごく厳しい。いま僕は家を改造しているんですが、半分以上改造しちゃいけないんですよ。それをいちいち見に来る。たかが一軒家ですけど。まあ、いろいろな事情があつてそうなっているんでしょうけど、でもやっぱりその規制をある意味で個々に判断していかないと、なかなかクリエイティブって生まれてこない。そのへんのシステムづくりも大事なかなと思うんですけどね。

■いま渋谷はクリエイティブか？

中谷:どうなんだろう？

黒崎:どっちともいえますよね。なにをもってクリエイティブなのかということは置いておいたとしても、新宿のまちなみの雑踏と比べてみると、新宿のほうがすごいガツガツしたエネルギーを感じて、渋谷のほうがほんわかしているという感じがする。そういうゆるい渋谷カルチャーっていうのがあるじゃないですか。ちょっと山手を控えた、のんびりとした人のいい……というのは確かにありますよね。新宿のほうがガツガツとした力があつて殺気立っている要素があつたりして、好きですけどね。どっちもどっちだけど、それが渋谷の良さ。ちょっといいカフェとかがビルの後ろにあつたりしたのがどんどんなくなっちゃってるのが寂しいと思う。ちょっと離れてもちょっと美味しいカレー屋さんがあつたり、ラーメン屋さんがあつたり、ちょっといいライブラリーがあつたり古本屋があつたりするのがいいかなと思います。そういう要素が状況としていっぱいあつて、おもしろい人が集まるような状況が生み出せれば。おもしろいロック喫茶やライブがあつたり、渋谷にはあることはありますよね。確かにそれはクリエイティブといえはいると思うんです。それをどう、後ろで見る人がちゃんと見ていって、プロデュースというかキュレーションしていくか。

そういう場所をあえてつくっていく人が、行政の中か、その近くにいればいいんじゃないかと思います。渋谷キャンパス化計画をシブヤ大学がやる。自由大学はまた違ったことをやっていたりする。コミュニケーションやファーマーズマーケットみたいなノリの運営の仕方は、行政のやりかたではなくて、まったく個人的なやり方です。就活しなかった若者たちを集めているわけですよ。バカじゃないし、それなりに意欲があつて、楽しいこととかおいしいこととかおいしいものがよくわかっていて、音楽の趣味もあるし、ファッションも好きなものもあるし、本を読んでいる。就職試験の面談のディスカッションがあまりにアホらしくて喋れなかったんで、学歴がよくても落とされたとかいってますけど、人に無理矢理アピールするための術がないと大企業に行けなかったりするところがあるようなんですね。そこからあぶれた人の中にいっぱいおもしろい人がいると思う。そういう人たちに仕事の場所を提供したりすることができるためには、仕事のコンテンツをいっぱい種まきすることが必要だと思うんです。それをみんなでやっていったらいいんじゃないかな。

中谷:そういう意味で、個々の小さい情報をコミュニケーションしていくことがすごく大事な問題だと思うんです。どうしても渋谷ってマスメディアの中の都市みたいなイメージになっていて、個々のそれぞれのコミュニティがなかなかコミュニケーションとれていないような気がするんですけど、このときにコミュニティFMができるわけですよ。コミュニティFMは都市のにとって大事なツールで、いま全国にいっぱいありますけど、取材してみるとかなりうまく機能しているところが多いんですよ。それをいかに育てるのかというのがクリエイティブにおいては、大事なポイントになっていくような気がしますけどね。

黒崎:あと、外国人とか世界中の人たちがいっぱい集まるような働く場所というのがいいよね。コミュニケーションも半分くらい外人の人たちだし、みどり荘も半分くらいがそう。外国人がちょっと場所を借りることがなかなかできないんですよ。そういえば、左京さんも会社辞めて結婚して家を買おうとしたら、NPO法人じゃだめだって言われたっていったよね？

澤田:言われたの？

左京:言われました(笑)。

黒崎:そういうことなんですよ。だから誰でもそこに来ていいというような、なんでもOKだ、という要素がどこかに必要です。外国人にとっても普通に働けるような場所が必要なんじゃないかと思うんです。渋谷がLGBTに対してすごく開かれた場所になったとしたら、もっと外国人や弱い人たちとか、バカな人たちとか、お金のない人たちでも、おもしろければいいと思うんですよ。そういう場所だったらクリエイティブになれると思うんですよ。

林:渋谷と新宿がどっちがクリエイティブかみたいな問いかけは微妙なところがあつて、クリエイティブを一軸的に定義しちゃう感じもするんですよ。「らしさがある」ということのほうが、創造的であるかどうかということよりも、問いとしてはじっくりくるところもあるんです。仮に、渋谷がリベラルで自由で、開放的だという方向感があるとして、仮に丸の内が逆の方向感だったとしても、それがすごい「らしさ」になっていけば、そこにはビジネスクリエイティブが別のかたちで生まれるかもしれない。「らしさ」をひっぱり出すというのが、昔の戦後の大きな会社では個性や差別化というより、きちんとちゃんとやっていくほうが成功確率が高かったんだけど、いまは全然そうじゃない。ビジョンのつくり方で個性や主観を出した結果として、それがクリエイティブなことになっているものなんじゃないかなと思いますね。

中谷: 僕は福岡と比べちゃうんですけど、福岡ってものすごくベンチャーに対して前向きでね。取材していると「そんなに応援しちゃうの？」っていうくらい行政も応援する志向が強いんですよね。実際、ベンチャーでクリエイティブ系だとけっこう成功例が出てきていて、全国的に活躍しているベンチャー企業も増えている。東京に負けないという意識が強くて、NHKにも毎月出てきて営業していく人もたくさんいてすぎぞ、という感じ。そういう機運が渋谷はすこしあったほうがいいんじゃないかなと思う。渋谷はやっぱり都市で有名だし、安心感が強いから、行政も安心感があるんですよ。ほっといてもクリエイティブだろう、みたいな感じ、ないですか？

澤田: まったくないですね。私はまだ4ヶ月目ですけど、課題はほんとうに沢山あります。これをブルドーザーのように解決するのって難しいのです。やっぱり一步一步解決しないとイケない。それと解決するために規制緩和や強化の話もあります。福岡市は戦略特区申請しています。それに福岡という地域がもっている特性もあるのです。渋谷は土地が限られています。仮にデータセンターを誘致しようと思っても更地があいてないですよ。10,000㎡の土地は空いていない。福岡市は10,000㎡の土地を提供することが可能ですし、法人誘致による税収増効果がダイレクトに行政にフィードバックされるのです。

中谷: ま、データセンターはいらないですけどね。

澤田: たとえばの話です。渋谷区はいま危機感を強くもっています。世界中で都市間競争が激烈です。23区内も都市間競争が厳しいです。その中において、都心の中央に位置している渋谷区というのは住宅状況が非常によくはない。家賃が高いとか、新築のタワーマンションを大規模開発する場所があまり残っていない。もちろん、いろいろな規制緩和をやって街の魅力を引き上げていきたいと考えています。そうやって我々は人を呼び込む力を持たないと、今後の行政課題を解決するための原資となる安定的かつ強い財政基盤を継続することはできません。もちろん、お金を使わないでできることは使わないでやりたいと思っていますが、やはり事業予算は必要なんです。それと都市部が抱えている課題というのは、高齢化の問題、子育ての問題、まちづくりの問題、防災の問題、危機管理の問題、道路整備の問題など、いろいろな課題に対して迅速に対応していかなければならないのです。安心なんかまったくなくて、区役所自体もまだ仮で、これから3年後に向けて新庁舎の建設を進めている。この新庁舎も旧庁舎の延長線上にないような新しいシティオフィスにしようと思っているんですけど、これもひとつの渋谷の方向感の具現化を体感できる場になればいいなと思っているんですけど、そういう意味においては、ほんとうにやらなければいけないことを、どれだけ馬車馬のようにがむしゃらにやれるのかという、まさにそのスタートラインに立っていると思っています。この会場のサポーターの方々がいらっしゃるので、みんなで知恵を出せばいいと思っています。必ずしも区役所は閉鎖的な場所ではないです。こんなにも開かれた場所はないと入区してみて感じています。

黒崎: サービスがいいですもんね。

澤田: 長谷部区長を見ていただければわかるように、どこにでも飛んで行きますから。積極的に地域に出かけていますし、誰とも話しやすいですし、私もそうしているつもりです。これから行政マンはそういうふうになっていくんだと信じています。

黒崎: 僕は富ヶ谷に住んでいるんですが、富ヶ谷なんかもいろいろなお店ができてきて、いろいろな人

がぞろぞろ集まっていて、チェーン店とか大規模でやるのではないほうがより魅力的だと思うんですね。

澤田:長谷部区長になって1年しかたっていませんが、相当渋谷区役所の雰囲気が変わっていると思います。仮庁舎というプレハブみたいところで、いままで絶対に区役所にこなかったらという方々が、外国人も含めて、世界中から集まってきて、いろいろなおもしろいクリエイティブな提案をしています。区長の頭の中でもアイデアが溢れているのです。それをいかに資金、スケジュール、民間企業とどう連携させるか、どういう仕組みでやるか、ということをしっかり進めていくのが副区長の仕事になります。これからの渋谷は個人的には「ポスト・シティ」だと思っているのです。渋谷がどう新しい都市として次にいけるのか。いまの渋谷の延長線上ではないところに渋谷があるべきだと思っている。それは単にマチのデザインだけじゃないですよ。

黒崎:先日、トラベルポートランドというポートランドの観光局の人が来たんです。僕たちは『TRUE PORTLAND:創造都市ポートランドガイド』という本を出したんですよ。毎年2万部くらい売れるんですけど、それが出たおかげで、日本からの観光客がポートランドがNYを抜いて一番になった。嘘みたいな話なんです。HISのツアーとかですごくいっぱいくるらしい。クリエイティブシティで学んでいこう、みたいな。80万人くらいしかいない都市でなにをするのかと思うんだけど、ホテルも足りなくなっちゃって……。

中谷:どんなことが学べるんですか。

黒崎:要するに、地方行政の人も含めて、未来の都市のあり方みたいなものを求めてポートランド詣でみたいな感じでいくんですよ。僕たちはそういうことを考えてあの本をつくったわけではないんだけどね。ただおもしろいから、「unofficial guide for creative people」という副題をつけて、刺青のお店を紹介したり、LGBTの話とか、普通じゃないのをばんばんいれたんですよ。ポートランドの行政自体がひねくれていて、普通と反対のことをやっているわけです。前のポートランドの市長はゲイで、若い子とセックスしちゃったのがバレてクビになった。それ自体はまだ許されるんだけど、年齢を知っていたにもかかわらず、年齢を偽ったからだという話です。むちゃくちゃ自由度はあるけれど、そういう都市なわけです。もちろんおいしいものがあったり、自転車もいっぱいあるし、マイクロプロワリーがたくさんあったり、ありとあらゆる未来的なものがいっぱいあるのだということで人気なんですよ。そういう要素は、NYでも、ブルックリンでも、ブッシュウィックでもある。ロンドンでは、オリンピックのときにオールドストリートとかイーストエンドとか、ダメだったところをこの機会によくしようとしました。ブラジルもオリンピックをきっかけに貧乏なところがよくなるということをアピールして決定されたじゃないですか。都市が変わるということ、イベントとしてのオリンピックだと思うんです。だからその要素はなんなのか、というのをちょっと冷静に分析してみるとおもしろいと思うんです。

林:ポートランドも、もう30年も前に、成長境界を定め、持続性、環境という方向をバシッと定めるというのはたぶんその当時、もちろん市民の支持は集めたんでしょうけど、そうやってもうかるのか、という話もあったと思うんですが、相当コンセプトチュアルな意思決定をしていて、それによっていまがある。個人でクリエイティブなことをやっている人もいつつ、インテルがすごい稼いでいる。そういうことも全部かなり前に相当割り切って偏った、というか当時だったらかなり偏ったと思うんですよ、スプロールはやめ、みたいな話とか。表面的に見える風景よりも、その構造に関心があるんですよね。

澤田:ポर्टランドには自治体の外に政策提言する組織があるんですね。つまり政策を行政が決めているというよりは、外側から政策提言するような、なかなか日本では現在ないような良いモデルが回っていると聞いていますし、それからやっぱりヨーロッパでも当たり前になっていますが、日本でもだいぶ力が入り始めていますが、PPP いわゆる公民連携、産学公民が連携していくというようなことで、実はまだまだ国内ではこれからのところがあるのですが、もう欧米では最初から事業に民間を引き込む。民間の資金を活用して民間のアイデアでやってもらう。それが当たり前になってきているので、渋谷区も、福岡市もおそらくそうですけれども、これだけ多くの民間企業が訪れる役所も珍しいと思います。行政が行政の中のアイデアとやり方とルールとだけで行政課題、地域課題を解決するのはもう不可能になっている。NPO、民間企業、シンクタンク、大学、専門機関とか、いろいろな方に参加、たとえばこういう場もそうですよね。こういう場もうまくアイデアを課題解決に導くような。その中で、アイデアだけでできない規制の問題やルールの問題は、少し時間がかかるかもしれませんが、東京都や国とも連携しながらひとつひとつやっていくというのがやっぱりわれわれの役割だろうと思っています。ただし、どこよりも早くやりたいという気持ちがありますので、焦りもありますが、着実かつスピーディにやっていくと私は思っています。

中谷:僕は仮想空間の都市計画というのをやっていて、それは情報ネットワークの中での都市づくりなんです。実はこういう渋谷区みたいなまちというところが、メタファーといわれるバーチャルな世界を構築していくことによって、いろいろな政策のプロトタイプ、シミュレーションができるということがあって、それをアーカイブもその中に当然加わっていて、当然渋谷区の持っている、さまざまな情報資産をちゃんと整理してどういうふうに見える化していくかということこれから土地の少ない渋谷区だからこそ必要ではないかと思っています。なので、渋谷区の魅力がなんなのかということはなかなか一言ではいえないし、そこにある課題もいっぱいあるけれど、ある意味シミュレーションしながらアプローチしていかないと失敗が起きますよね。やってみただけだめだったというのがこの状況においてはゆるされない。長谷部さんにしても、やる気のある方だからこそ、失敗はしないでほしいですね。うまくものづくりして欲しい。ぜひシミュレーション機能をしっかりとってほしいと思うので、「メタバース (Metaverse)」というものです。興味のある方はまたご説明したいと思っていますが、シミュレーションも必要なんじゃないかなと思っています。

紫牟田:そろそろ、会場のみなさんも一緒に議論をしたいと思うのですが、どなたか参加されたい方はいらっしゃいますか？

A:渋谷に長年住んでいるんですけど、全体的に導線が悪すぎて。いま私は代官山に住んでいるんですけど、坂が多くて、結構岡のまちがあるのにつながっていないんです。私がよく使う大和田図書室は小学校跡地に新しくつくられているんですけど、その建物の中の導線があまりにもユニバーサルじゃないんです。エントランスに行くには必ず階段かスロープをあがっていかなければならないんです。エレベーターが2台しかない。一階がエントランスだったら体の悪い人も老人も行きやすいのに。前の渋谷区長さんにお手紙を出したんです。せめて雨の日くらい、従業員が使っている階段を使わせてくれないか、って。しょうがないって返事が来たんですよ(笑)。それですごくがっかりしたんですが、今日の話聞いて、ちょっとは可能性があるのかな、って。

澤田:「ちょっと」に変わったのですから、よくなっていますね。

A: 渋谷区内に自分のマンションの建て替えもやっているんですけど、高さ制限ですごく苦しめられて。途中で急に2m 低くしろとかあって、ほんとうにすごくがっかりしていたんです。でも今日、すごくがんばっていただきたいなど。住民の話を聞いてもらえるような窓口をつくってほしいですね。以上。

B: いまの話の最後にあったんですが、意見表明の場所について、こういうことがいいんじゃないかとか、こういうことがあったんだけど、と言い出すのがむずかしい。ハードルが高いという感じなんですね。そういう場を行政がそこいらへんから設定するという仕組みをつくるとかそういうことって考えられないか。今回、黒崎さんや林さんのような立場の方が、そういうものはそもそも考えたやつが乗り越えればいいと仕組みはつくらなくてもいいと思われているのか、それぞれの立場でご意見いただければ嬉しいです。

黒崎: 僕は行政に期待していないので、しょうがないやと、そこをゲームのようにやっちゃうわけですよ。国連大学も治外法権だ、中庭では平気だとかいって、いちごっこみたいな感じなんですけど。なににも抵抗がなく、世の中すべて正しく行われるなんていうところはどこにもないわけですよ。建築なんか、すべて法規との戦いじゃないですか。ひとつの条件だと思って、それをどう切り抜けるかとか、出し抜くかとかいうことだと思う。すべて正しいことがそのとおりにかないのだから、相手が悪いと思うほうがおかしいんじゃないか、というくらいの気持ちで僕は生きてきたんで。

中谷: すごくクリエイティブだと思います。

黒崎: っていうか、そういうふうになんでもかんでもやってきたので、そういう人もいるんだということをわかっていただければ、どんなことでもできるんじゃないかと思うんです。そう考えると他の国に比べても、日本はまあまだマシなんじゃないかと思うところも多々ある。渋谷だって、区役所いってもすごくいじわるで宗教が違うからだめとかいうことはないじゃないですか。

あと、僕はどうにか難民を渋谷区で受け入れてあげたらいいんじゃないかと思っています。着の身着のまま世界中を渡り歩いている人なんて本当にかわいそうだなと思うので、そういう人たちを渋谷区が初めて受け入れるとかいったらいいんじゃないかなと思ったりします。そうしたらファーマーズマーケットで食べ物でもなんでも出してあげたい。そういう人から学ぶことってすごくあると思うんですよ。そんなリスクを負って生きている人なんか日本にひとりもないですもんね。そういうことに開かれた場所であってほしいと思いますけどね。

林: 僕は黒崎さんほどロックに生ききれていない、中途半端なところがあるんですけど、そういうノリでいうと、仕組みというか、窓口みたいなものとかはなんらかすでにあるんだと思うんですけど、でも僕はいまだに知らない。ルールにしてもクレームにしてもアイデアにしても、僕はなんかいろいろと技術的にはソーシャルメディア的なものでいろいろなかたちであるので、おもしろくいいやりとりの場はぜひあったらいいかな、と思います。先ほどのモンスター的な話にしても、僕はモンスターみたいな意見って、とらえようによってはおもしろいと思うところもありますね。ギャグ的な意味というか、嫌味的な意味でいうと。真面目なプレゼンもあり、モンスター的なプレゼンもあり、ものすごく知的でクリエイティブなプレゼンもあったりして、それをイケてるとかイケてないとかみんなで見たら、そこに見えてくるものがあるような気がするんです。そういうのを、なんというか、開かれたというより、楽しくおもしろく、パブリックやルールに対して問うような場とか仕掛けこそ、クリエイティブにつくったらいいなあと思います。僕はゲリラもやりますが、そっちもそっちで考えようかなという気にはなりませんね。

B:まさに林さんがおっしゃることは感覚的に近んですが、澤田さんはいかがでしょう。

澤田:いま渋谷区もそういう場を持つようとしています。過去にもあったと思うのですが、我々が考えているのは、オープンイノベーションをどうやって起こせるか。あまり行政が前に出すぎてしまうと、予定調和になってしまうので、まさにNPOに期待しているところも多いですし、民間に立っていただくという仕組みもあるかもしれないし、この場をもっと発展させるということもあるし、いろいろな選択肢があると思いますね。先ほど申しましたように、課題は本当に日々変化していますし、何度も申し上げるように、ブルドーザー的には解決できない。ひとつひとつ着実に変えていく。それもひとつの行政の役割ですし、また、合意形成にはすごく時間がかかるというもある。住民の方の意識もいろいろある。たとえば、大和田のこともそうだと思いますけど、どういうコンセプト、どういう設計でそれをつくったのかということですよ。そもそも。あれは6年位前の話で、設計はもっと前ですよ。私はまだ来たばかりですが、まさにそういう場づくりというのを我々があまりしやしやりせずに、緩やかにマネジメントに参画していくような連携方法を来年くらいから少し進めていこうとしています。来月またひとつそういう発表させていただきますし、来年度の事業のひとつです。まさにこういうことができるような組織のあり方を研究する予算もとっています。2年後くらいにはいろいろな人を引き込んだ組織体を立ち上げようかという検討も進めています。まだしっかりとご説明できない段階のものがたくさんあるものですからお許してください。

B:いろいろでてるのを楽しみにしています。

C:都市工学を専攻している学生です。ポートランドみたいなクリエイティブな人々が集まるまちを目指すと同時に、ゲッター的なアンダーグラウンド的な要素も持ち合わせていると思うんですが、けっこうここにいる方々はアンダーグラウンドに関わる機会がそもそもなくて、ある意味、上の層しか見えていない人が多いように思えて、そもそもアンダーグラウンドにいる人たちというのはそもそもこういう場にはこないし、区役所にはこないんですよ。そういう人たちを巻き込んでイノベーションを起こせたら、渋谷はもっとおもしろいまちになると思いますし、そういうところにたずさわっている人たちとか、僕たちみたいな人たちにもっと目を配ってくれたら、というか、目を配るといのはすごい上から目線でいやですが、そこを巻き込めるような工夫をしてくださるとおもしろいんですけど、そのためにこれから渋谷区がやっていこうと思われることがあればうかがいたいと思うんですが。

黒崎:去年の大晦日に「rethink food project」というイベントをやりました。普通に生活しているとわかりませんが、いま小学生や中学生の貧困な人たち、食べ物が食べられないみたいな生活をしている人たちが結構います。実はファーマーズマーケットをやっていると9割くらいが売れて、1割余るんです。農家の人たちは持って帰っても捨てちゃうわけ。そこでそれを全部もらって、ミシュランふたつ星の料理人が手伝ってくれて、材料費タダですごくおいしいものをつくってくれて、若い子たちはパスタをつくったイベントです。ホームレスの人も来たり、お金持ちの人も、海外から来た人も若者たちもふらふらしてた人たちも来て、独特の雰囲気が出て、なんかそういう人たちがお互い話していたりして、僕たちの周りにフリーランスで働いている人たちとも打ち解けて話したりしてね、そうするとこういう生き方もあるんだ、みたいな。都市工学を研究していて、どこか建設会社に就職して、みたいな設計事務所に入るかというので



はない方向でもいっぱいいろいろな働き方があるということを知るような状況をつくったんですね。すごくよかった。そういうことを僕たちもやっているし、シブヤ大学でも自由大学でもそういう人たちを呼んできたりとか。いま『we work here』という、100人のフリーランスの人にどうして生活が成り立っているの？みたいなことを聞く本をみどり荘の人がクラウドファンディングでつくっているんです。日本でもこういうことをやっている人がいるんだ、みたいなことを、いっぱい取り上げた本です。それをネットで売ったりとか、クラウドファンディングで印刷代20万集まったりとかすると、世の中捨てたもんじゃないかと。どこかに頼らなくても自分たちでやれなくもないということを、僕としてはいろいろなところで例をつくっていきたいと思っています。東京はこうで渋谷はこうだと思っているかもしれないけど、理想的な状況ってないことはないと思っています。そう思って、もうちょっと楽観的にいろいろなことをやっていくと、結果としていいことが起こるんじゃないかと思っています。

紫牟田: 質問の意味が何をいうとあまりわからなかったんですが、どういう意味で「アンダーグラウンド」っておっしゃっていますか？ アンダーグラウンドという意味は、アンチカルチャーという意味でいっているのか、裏社会という意味でいっているのかわからなかったんです。アンダーグラウンドカルチャーはクラブシーンなどの文化とすればものすごくクリエイティブに生きている世界だと思うんです。でもいまの黒崎さんのお答えはどういうふうに受け取られましたか？

C: 僕が意図したのは、もちろんカルチャーはありますが、たとえば渋谷で行き場をなくしている若い子とか僕たちもそうだし、が、それが大人になって、ある意味裏社会というか、あまり綺麗といわれていないエリアにいたり、でも実際、そういう裏社会でいきている人たちってけっこういるわけで。そういうところに対して、どうやって、コミュニンとかでいろいろやっていたりしても、そこにはそういう人たちはこない。そういう人たちに対してどうアプローチすればいいのかということを知りたかったんですね。

紫牟田: いまの黒崎さんは、イベントを行うことによつて、いろいろな人が交流できる場をつくるというお話でしたが、これについてはどうお考えですか。

C: そのトライアルはすごくクールだと思います。知らなかったことだったので。華やかなものだけでなく、そのあとの残りというにそういう人たちに還元している動きはすごくかっこいいなと、いい取り組みだと思います。

澤田: 生活に困っているのか、職業支援が欲しいのか、熱中しているものを発表する場が欲しいのか、具体的にわからないといいようがないところがあるんですが、例えば仕事がないのであれば、そういう窓口もあるし。ちょっと役所的になっているけど。生活の問題であれば給付をする窓口があるし。もうちょつ

と困っていることを教えてくれたらいいんですけど。困っていることがないんだったら、話し合ったほうがいいと思うんですけど。

C: 複雑なんで、あとでお話します。

シブヤ大学スタッフ: クラブカルチャーというのはシブヤが持っている文化だと思っているんです。クラブカルチャーはすごくエネルギー場ですごくクリエイティブな部分ではあるけれども、シブヤは迷惑防止条例かなにかで、ダンス禁止というのがあって、2時くらいまでしか踊ってはいけなくて、時間制限があって、そのあとはクラブで踊ることが禁止されているというような条例があるんです。

中谷: それはもうはずされたんじゃないですかね。

シブヤ大学スタッフ: それはある意味でクリエイティブを阻害する条例で、一時期アンダーグラウンドでは、意味がわからない条例だというのがあったんですけど、そういうのがイケてるアンダカルチャーを阻害しているのであれば、そういう部分で、一緒に新しいクリエイティブをつくれるところがあればいいというような質問だったのかな、と。

C: ちょっと違うのであとで。

D: 別に質問ではなくて、気にかかっていたことがあって、最後のほうで副区長さんが失敗してはいけないうて。新しいことをする上で失敗してはいけなくて、というような話をしていたように聞いたのですが。

中谷: それは僕が言ったんですね。

D: ああそうか。でも失敗というのがすごく気にかかっている、行政と一緒にアートプロジェクトをいろいろやっている友達がいるんですけど、一年で予算が全部なくなるとか、新年度でできるかわからないとか不安定な状態で、失敗したらもう次はないかもしれないと言っていたりするんです。だから、新しいオープンな場をつくるというときには、失敗してはいけないということではなくて、プロセスみたいなものをすごく大切に思う、そういう心持ちでそういう場をつくって欲しいなと思いました。

中谷: 僕が失敗してはいけないといったのは、医者と行政は失敗してはいけないんですね。やっぱり痛みが相当伴う。そういう意味で、シミュレーションをしっかりとしてほしいなと思ったんですね。

紫牟田: 個人で失敗できるところと、大きく責任をもっているところとの違いかもしれないなと思いました。個人ではいっぱいトライ&エラーできるようなことはとても重要ですね。

澤田: 失敗はしてもいいと思っているのですね。公的な機関の失敗、大きい失敗から小さい失敗までいろいろありますし、最初から失敗するか成功するかわからない、社会実験をするようなものもあります。スモールサイズで、将来は大きくするのですが、まずこのやり方がいいかどうか、あえて失敗を探していくような、そういうプロジェクトも、あまり目立たないのですが、行政機関でもやっていたりするんですね。いきなり大きく投資してしまうと引き返せなくなってしまうので。歴史的にいうと、昔は人口が減少していく段階で、体育館をつくったりホールをつくったりしていたところはありますよね。でも今どうなっているかと

いうと、さらに人口減少して、負の遺産になっていたりする。そこに産業を起こす。成功と失敗を繰り返す、その連続性の中でいまがある。必ずしも、失敗してはいけないとは思っていないんですけど、大きな失敗をしてしまうと、特に資金がかかっているようなもの。税金を使って大きな投資をするというようなことに対しては、失敗をできるだけゼロ化していく努力を惜しまないということが公的機関の役割かなと思ったりしています。

E: 林さんがお話されていたことが気になっていて、コンセプトでどちらにいくのかというような議論ってなかなかされないかなと思っていて、当然いまの自然発生的にいろいろなものが進展していくという都市のあり方と、少し先、先というとすぐ 20 年とか 30 年とか、それって全然先ではなくて、やっぱり 50 年とか、もっと先からバックキャストしたときに渋谷がどうあったらいいのかという議論ができる場がもう少しあってもいいのかな、と感じました。

澤田: その通りだと思います。将来を考えると、20 年先って、もう確定していることがあると思うのですよね。人口減少だったり高齢化だったり。でもそれよりロボティクスが進化するとか IoT がもっと本格的に生活の場に入っていくとか、そういう技術革新を含めてまさに一応 20 年先を目指した、そのときに行政はなにをすべきなのか、なにを今から準備しなければいけないのかというのをローリングしながら少しずつ変化させて理想に近づけていくことが重要なのです。みなさんに十分に伝わってなくて申し訳ないのですが、これからパブリックコメントも求めていると思うので、ご参加をいただければと思っています。

左京: いまの社会のシステムは、全然完全ではない。完全ではないということを前提として、それをよりよくしようということではできると思います。例えば、結局「同性パートナーシップ条例」にしても、国まで議論は持ち上がったけれども、国としては慎重な議論を要するという結論しか出せなかったけれども、渋谷区は条例というかたちでひとつの突破口を開くことができた。制度としては諸外国に比べてまだ不完全だけど、そういうふうな半歩踏み出したというのはいいなと思うんですね。そういうかたちで社会が変わっていくのはワクワクする。先ほど話が出た Uber や Airbnb、あるいはそれが生まれてくる地域の人たちのメンタリティの中で、民泊が法律的に白か黒かということではなく、「そもそもこういうことっていいよね」「こういうことは楽しい」「こういうことが当たり前になったらいいよね」ということを考える人たちが先に動き出して、それを行政側が、それならどういふルールが必要かということを考えていって、それがデファクトスタンダードになっていくようなまち。それがあの条例のときに渋谷でもできたんだと思うんですね。ただ、そんなふうな渋谷のまちが不完全な状況を半歩先に進めていくような状況を、「行政が」とか「誰々が」とかじゃなくて、そういう人たちがいろいろな立場で集まってきて、勝手にやったり連携してやったり、ときに「えいっ！」でみんなで一歩ずつみんなの前に出して変えていくようなことになるといいな、と僕が思ったことなんですけどね。

紫牟田: そろそろ時間になりました。人間はものすごくクリエイティブなものだとも思います。デザインとかアートとかを考えていくと、普通の日常の工夫だったり、営みそのものの行為そのものだったりするところから始まっているはずなのに、それを才能があるとかないとかいうところに押し込めているような気がしています。そういうことを考えていくと、私たちは自分たちでつくったものだったら文句を言わなかったりするのではないかなと思うんですね。自分たちが工夫してなにかやったら、自慢に思っただけで使ったりするはずなんです。都市を考えると、行政になんでもやってくれ、なにやってくれ、というばかりにならないような状況がクリエイティブではないかと思う。そういう状況をどうやって手に入れるのかということが大事な

ではないかと思います。よかれと思って誰かがつくったものだけど、自分がつかいこなしたら自慢になるのではないか。国連大学の広場のファーマーズマーケットもそうなんじゃないかと思うんですね。そういうありようはどこにでもころがっているのではないか。ある種の曖昧で不完全なことを許せるという意味にも近いのではないかと思いました。そういうことが社会的なビジネスという意味でも、自分たちがつくるルールという意味でも見直されるべきだし、そこにはクリエイティブがあるのではないかと私自身も思っています。

それでは、最後に一言ずつお願いします。

黒崎: 制約があるとか、安全に綺麗にというのは誰でもいうわけで、お母さんがそういうわけで、お母さんをどうだまして自分で裏で悪いことをするかということを考えて生きてきたわけだけど、さっきのアンダーグラウンドの話もそうなんだけど、まあ、アンオフィシャルであることや正しくないようだけど実は自分にとって真実であることを追求するということは当然あるわけで、美術の歴史をみると、世間で美しいと思われることをいかに欺いて、汚いと思われることも実はきれいだったり、そういうことを追求する歴史だと思うんです。現代美術の最前線はまさにそういうことで、世間でいっけん汚いとか醜いとかいわれていることに、実はそこに真実があるのではないかという視点というのは永遠に求められる。真実はそこにあるのではないか。なにかあってそこに抵抗があるのは、行政がそうであるなら、どうにか餅つきをやってみんなで喜んでみようということで、当然、まともなことをいうと思うんです。担当者も悪い人じゃなくて、真面目に仕事に忠実でルールに忠実であるだけなんだけど、でも客観的にみても自分なりにそこで農家の人たちがお米をもってきたのをそこでみんなで楽しみたいというだけなので、そこで目くじらたてて、法的にどうしてほしいとか、オフィシャルでやってもいいなんていうことを思わないほうがいいんじゃないかと自分の経験からね。そういうのは楽しめてにこっと笑って、許してもらえるようにしながら、という範囲でなんでもやっているとというのが日本の社会の良さだと思うんですね。ルールや法律的にどうかというのを超えた独特の価値観みたいなものが、日本の社会の良さだと思っています。それがシブヤにあって、ある種の美しさに近いものではないかと思う。そういうゆるさとかを考えながらやりたいことをやっていけばいいんじゃないかというのが自分にとっての結論ですね。それがクリエイティブな生き方だと思う。まちがそれを許してくれればいい。他の国ではそれをやって殺されたりするわけだから。

林: クリエイティブな都市はデザインできるかというテーマでしたが、市長・区長にとってのデザイン行為もあるでしょうけれど、僕自身は一市民として、都市のデザインは昔みたいに地図をかける時代でもないので、僕ら自身の小さなピュアな一石を投じる結果の集合体が結果的にデザインだという感覚なので、超在野としてそのスピリットをこれからも持っていたいと思います。一方で、パブリックというか行政というところがおもしろくなってきたのは事実で、いままでみたいにいい顔をする前提ではない方向で、特に渋谷区がリードして、クリエイティブなルールデザインがあったり、メッセージやコンセプトを出していくということも、いままでなかった都市のデザイン行為として、おもしろくなっていくという予感が勝手にしています。そこに、外側からだと思いますが、関わりたいという気がしましたね。

中谷: 僕は無口になってしまったんですが、すごくもやもやしています。モードとしては行政がしっかりしていろいろなことを決めて規制を緩和してやっていかなければならないという話し合いなんだけど、実は市民に黒崎さんのような人が2、30人いれば、ものごとはすごく変わるわけですよね。それくらい自由に、母親の目を盗んで好き勝手にやるのがクリエイティブだよというのはまさにそのとおりで、話を聞いて、かなり感化されて二回目の化けができるような気がしましたね。こういう生き方もできるなど。渋谷区はなんだかんだと問題はあるけれどもかなり恵まれたところで、それに長谷部さんという人は黒崎さんみたいな

人じゃないですか。いろいろな新しいイノベーションを求めているいろいろなことをやっている。それをおもしろがっているような。長谷部さんができればいろいろなことができるような場になればいいなと思ったりする。僕からの提案ですが、渋谷区がかなり恵まれた都市であることは確か。課題はあるでしょうけど。でも全国には地方創生といわれているように、なにもめぼしい産業やタネがないところがたくさんあって、そういうところをうまくリンクして、渋谷系といわれるような言葉があるようなグローバルな都市渋谷がいろいろなところに、タネを蒔いてつながって行って、この情報化社会を盛り上げていくリーダーでもあるという気はします。ぜひとも長谷部さん、澤田さんにはそういう意識をもって地方と、さまざまな地域とリンクして、この渋谷のためにもそれを使っていけるような気がしましたね。

澤田：副区長になってまだ4ヶ月目なので、みなさまからいろいろなご意見、激励をいただいたと勝手に認識しています。いろいろな課題はあるのですが、ひとつだけ、身近な例でいうと、渋谷区民ではなくても、同じ課題を抱えていると思うのです。これから引越しのシーズンじゃないですか。いまマイナンバーカードとかもありますよね。引越したと会社出勤の前に役所にいかなくちやならないですよ。面倒臭いです。役所に行かなくする方法はないかと考えているのです。どうして印鑑証明がいるのですかね。サインでもいいはずですよ。わざわざ区役所に来なくても家や通勤電車のスマホからできるように準備していきたいと研究を始めています。2、3年以内にこういうことを実現して、こういうことをいち早く実験する街にしていきたいと思っています。いろいろな意見もいただきつつ、チャレンジしようと思っています。福祉も教育も、都市開発も、納税・徴税という仕事もある。やらなければならないことがあるのは行政も民間も同じだと思います。みなさんをお願いしたいのは、行政機関は特殊だと思わないでいただきたいということです。決して変わったことをやっているわけではないのです。日々みなさんと同じで、クライアントの課題を解決したいとか、お客様にひとりでも喜んでほしいとか。仕事って課題解決ですよ。いかに課題を解決するかは、行政もやっている仕事はまったく同じで、長く民間でやってきた私も役立つことができます。いろいろな人にもっと入ってきてもらって、民間人がもっと行政に入ってきてもらいたい。公務員試験ではなくて民間の人に入ってもらえないかと考えています。ITスペシャリストにきてもらうとか、クリエイティブのスペシャリストとの取り組みなど。もし行政機関がこれからおもしろくなるな、と少しでも感じた人がいらっしゃれば、公務員試験を受けるのもひとつの方法です。3年間だけ渋谷区で働きませんかとか、5年だけ働きませんかというような制度もあります。でも行政は本当に情報を伝えるのが下手なんです。区民ニュースを月二回、全戸にポスティング配布しますし、ウェブサイトも、サービスをスマホ上で快適に動かすことも、来年の事業計画の中に盛り込みました。少しずつ変化を感じていただいて、すごくおもしろいことを考えているのです。区民の方だけでなく、シブヤが好きな人、いま「渋谷民」という言葉をおいていますが、渋谷が好きな人がもっと渋谷が好きになる、こういうことをやるのが渋谷だよ、とひとりでも多くの人に笑顔になってもらえるような、そういう行政になっていければと思っています。私は微力なのでできることは小さいかもしれませんが、渋谷区職員一体となってやっていこうと思います。本日はいいアイデアをいただきましたし、逆に元気付けられました。

紫牟田：ありがとうございました。時間を超過してしまいましたが、参加していただいた方もお考えになったことがあると思います。よろしければアンケートにご記入ください。ただ、今日は澤田さんが大活躍で素敵な区になりそうな気がしましたが、私たちは、まちをつくるのは市民だということを意識していきたいと思っています。まだまだいろいろな人がまちをつくるのは行政だと思っていますが、ひとつひとつ社会に良いと思えることを自分たちでクリエイティブに解決できるまちにしていきたいと思っています。林さんがいうように、クリエイティブな都市がデザインできるかどうかということは誰の問題なのか、と問うならば、それぞれが生き生きできる状況をデザインすることだという話ではないでしょうか。

今後も、さまざまなものごとを都市の問題として横串に考えていくシリーズはまだ続ける予定です。
本日は、ご登壇いただいたみなさま、ありがとうございました。また聞いていただきながら参加していただいたみなさま、どうもありがとうございました。